45. ピーターの法則と首相

大分昔、ピーターの法則というのを新聞で読んだことがある。今でもうろ覚えで覚えている。それは例えて言えば、「優秀な係長が昇進して課長になった場合、課長でも優秀である保証は何もなく、そこで能力が限界となる場合もある。同様に優秀な課長が部長になった場合、部長でも優秀である保証は何もなく、そこで能力が限界となる場合もある」、というようなものと理解していた。

つまり、昇進して求められる能力は、その前の能力の延長線上にあるのではなく、質的な変更が伴う対応が求められるということなのだ。このことを理解しないで昇進を喜んではならないし、昇進をさせる側も無責任であってはならない。上の職位を全うできるかは、下の職位の成績だけでは判断できないのだ。

ここで、改めてピーターの法則を調べてみた。ピーターの法則とは組織構成員の労働に関する社会学の法則ということで、次のようにある。

（1）能力主義の階層社会に於いて、人間は能力の極限まで出世する。すると有能な平(ひら)構成員も無能な中間管理職になる。

（2）時が経つに連れて人間は悉く出世していく。無能な平構成員はそのまま平構成員の地位に落ち着き、有能な平構成員は無能な中間管理職の地位に落ち着く。その結果、各階層は無能な人間で埋め尽くされる。

（3）その組織の仕事は、まだ出世の余地のある、<u>無能レベルに達していない人間によって遂行される</u>。

この問題を回避するために組織がとりうる手段として、次の段階の仕事をこなせる技術と仕事のやり方を身に着けるまで人材の昇進を控える方法が挙げられる。例えば、管理能力を示さない限りは、部下を管理する地位に昇進させない、などである。

プルチーノ（イタリアの人）らは、計算機を使って様々な昇進ルールを比較した。すると、最も優秀な者と最も無能な者を交互に昇進させる方法と、無作為に選ばれた者を昇進させる方法が、ピーターの法則の影響から逃れ、組織の効率を最も高くすることができた。プルチーノはこの論文により 2010 年のイグノーベル経営学賞を受賞した。

ピーターの法則は、中々おもしろく本質的なことを言っているので示唆に富んでいる。

菅首相は安倍内閣で官房長官を 8 年近くも務めた。その間の能力には定評があり、名長官と言われていた。2020 年 9 月安倍首相の突然の引退で、党内事情も絡んで党内各派閥の推薦を得ることになり首相なった。主導したのは二階幹事長だった。

首相としての出だしは支持率 65 %と好調だったが、日本学術会議会員の会員任命問題でミソをつけ、コロナ感染が増加する中での観光支援策「GoTo トラベル」停止時期の判断ミス、その間の国会での答弁能力や記者会見での説明不足、リーダーシップのなさなどが重なり支持率は 39 %と急速に下がった。菅首相の能力が疑われはじめているのだ。

大番頭としては能力があったが、店主の首相としては能力のないことが明らかになりつつあるということか。であればピーターの法則そのものではないか。

一方で、それ以前に官房長官として本当に能力があったのだろうかとも思う。能力はあったと言われても、一般国民の知る印象は官房長官として日々会見する姿でしかない。その姿は、記者とのコミュニケーションを遮断する「そのような指摘は当たらない」、「全く問題ない」、「その批判は当たらない」、といったようなごく短い句しか発しない印象が強い。記者と正面から向き合わないで、木で鼻をくくったような句を繰り返すことでコミュニケーションを遮断し、実質的には何も答えない。記者の後ろに国民のいることを考えない訳ではないだろうが、これでは国民とのコミュニケーションの遮断でもある。説明責任を果たさなかったということだ。ボロを出さない為の自己防衛としか見えない。

名長官と言われるのは、国民の見えない所で人事権を武器に様々な駆け引きを行って安倍内閣を守ったからなのだろう。権力者は謙虚でなければならないのに、人事権の濫用は自らの無能を示すものでしかないのではないか。ならば、首相としての能力そのものにも疑問だ。

新聞の「首相の一日」を見ると、1 分刻みで動いているのは凄いとしか言いようがない。とても真似できるようなことではない。

12 月 19 日の新聞記事は、『夜の会食「1 日 2 件」が基本』と題して、菅首相は官房長官時代の行動パターンをさほど変えていないと伝えている。長官時代、会食は「一日四件」が定番だった。朝 1 件、昼 1 件、夜 2 件。首相就任後しばらくは夜も 1 件ということが多かったが、年末となり「二階建て」が目立ってきた、とある。14 日の 2 件目の会食は 8 人の忘年会で（幹事長に呼びだされたとか？）、これが世の批判にさらされた、というのは脇に置く。

公務以外に、こんなに忙(せわ)しなく人と会って本当に得るところがあるのだろうかと思ってしまう。人を幸せにする基本的な政策を考える上で何か得るところがあるのだろうか。それとも、もっと哲学的ことや文化的なことを求めているのだろうか。どうも実務的なことしか求めていないような気がしてならない。ただ、「首相の一日」を見ていると、コロナの感染予防で会食等の自粛要請も指示している手前、最近は公務後は宿舎に帰ることが多いようだ。一国の首相に物申すのはとても憚れるが、もっと人を幸せにするために、まずは一人で物事や政策を深く考えることが必要ではないか。

（2021 年 1 月 6 日）

（追記）「日本学術会議の会員任命拒否をめぐる沢山の抗議声明の中で、博識に裏打ちされた豊かな表現で異彩を放っていたのが、イタリア学会の声明だった」と記事にあったので読んでみました。下記で見られます。

http://studiit.jp/pdf/声明文（理由付き）.pdf

http://studiit.jp/pdf/声明文についてもっと詳しく知りたい方のために.pdf